

第10回ヨーロッパ麻酔科学会学術集会 (Nice)

久野 健二郎*

2002年4月6日から9日にかけて、フランスのニースに於いてヨーロッパ麻酔科学会 (ESA) 学術集会が開催されました。第10回記念と言うこともあり、壮大に行われた集会の様子の一片でもお知らせできれば幸いです。

開催場所であるニースはフランス南部の観光都市としてヨーロッパのみならず世界各地から人が集まるバカンスの地であります。カンヌ、モナコ等を含めた一帯は、紺碧 (Azur) の地方を意味するコートダジュール (Cote d'Azur) と称され、空に映るような碧い海と降り注ぐ陽光が人々を魅了します。シーズンにはちょっと早いですが私、そして参加された皆さんも間違いなくそんな風景を思い浮かべて街に降り立った事と思われまふ。しかし、迎えてくれたのは曇り空に小雨混じりの風と、少し残念な天候でありました。会場となったアクロポリスセンターは飲食店の並ぶ活気溢れた旧市街に近く、多くの方が立ち寄り、食事を楽しまれたことと思われまふ。魚介類をベースに、塩の効いた漁師風の味付けが印象的でした。

今学会の一般演題総数は743題、採択率は86%とのこと、日本からの演題は恐らく19題でありました。国際学会が初めての私に、これが多いか少ないかは判断しかねるところなのですが、演題登録の時期から考えても昨年の同時多発テロ事件の影響が少なからずあったのではないかと考えております。演題数の多さから推測される通り、多岐に渡った発表がありました。レミフェンタニルやレボプピバカイン、ロピバカイン等の最近導入された薬物、そして新しいモニタリングに関する発表が目立ちました。これは日本国内の学会発表と同様の感と言いますか、むしろ多いような印象

を受けました。また、トルコからの脊髄くも膜下麻酔に関する複数の報告などお国柄が伺えるところもありました。発表はポスター展示とスライド発表のポスターディスカッション形式で、およそ10人のグループごとの進行でありました。私の発表は小児開心術における人工心肺導入時の脳内酸素化に関するものでしたが、左隣で同分野の研究を韓国の Han 先生が発表され、右隣では京都府立医大の上野先生による小児開心術時のフェンタニル使用量についての発表と、奇しくも日韓から3演題が並ぶ形となりました。カナダからも2演題も同セッションにあり、座長の Bichel 先生には世界各地からの有意義な発表を感謝する旨のコメントをいただきました。

リフレッシュコースは14分野、40テーマがあり、特に集中治療に関連したものが16と最大でした。各45分との時間とテンポ良く進行していましたが、人数に対し部屋が狭めと感じました。話には聞く米国での学会ほどではないにしろ、朝8時30分より最大9つのコースが平行して催されるスタートダッシュ型ペースに少し戸惑いを覚えたところに、併せてパネルディスカッションも開催され、主観ながら日本の学会と比べてよりオフエンシブなプログラム選択が必要かと感じさせられました。昨今の多チャンネル・ブロードバンド化の中でもただそれだけでは有益な情報を蓄積できないと言いましょか、早い話が一番聞きたい講演の部屋に行ってすばやく座ってしまう姿勢が必要かと思われまふ。

参加した中で脳循環の非侵襲的モニタリングのレクチャーが知識の整理に役立ちました。また、小児手術中の大量出血についてのセッションで各国の方の意見を聞き、やはり王道は無しと理解すると共に、皆さん各地で苦勞している姿を実感し

*北海道大学大学院医学研究科侵襲制御医学講座

ました。これらセッションは選択して参加する形になるのですが、立派な冊子にそれぞれがまとめられていました。

人工(代用)血液に関するパネルディスカッションでは、紛争、テロ、BSE(牛海綿状脳症)といった時事的な話題をふまえて議論が進んでいくのが印象的であり、これに加え日本内の発表に比べ、よりコスト重視の展開を感じました。また、先端の知見にはやはり米国からの発表やFDAの影響が大きいことが伺えました。ちなみに、ランチョンセミナーのランチはやはりヨーロッパサイズでありました。

ヨーロッパ各国、世界各地からの参加者を集めた今学会に参加し、自分なりの知見が得られたことに加え、北欧の背の高い方々と接したり、地中海付近の方々の訛りある英語を聞いたりする体験ができたことが有意義でした。一つの会場内だけでも人種、文化のるつぼであるヨーロッパの一端を実感できた学会参加でありました。2003年は5月末にグラスゴーで、2004年にはリスボンでの開催が予定されている本学会にも参加できればと思っております。会員の皆様もご検討されてはいかがでしょうか。大変魅力的であると考えます。